

弱点を強みに変えて、人気水族館を生み出す

水族館プロデューサー

中村元さん

「おかしいと思ったら、自分で変えてきた」。

「水族館プロデューサー」という

日本でただ一人の肩書を持ち、

幅広い分野で活躍している

松阪市出身の中村元さん。

鳥羽水族館や

新江ノ島水族館、

サンシャイン水族館など、

それぞれの個性を生かし、

多くの人のを楽しめる

展示を発案してきた。



**故郷・嬉野が育んだ
自然への愛着と考え方**

「天空のオアシス」「生きている水魂」「ニッポンの水族館」……。「どんな水族館なんだろう」と、ワクワクするコピーは、全て中村元さんがプロデュースした水族館のテーマだ。まずは、実際にどんな水族館にするかを決め初めにどんな水族館にするかを決めてコピーをつくるという。

「水族館プロデューサー」という自身の肩書も同様。「プランナーでも館長でもない、水族館全体をどう動かしていくかを考えるのが自分の役割だと思つたからね」

1956年、一志郡嬉野町（現・松阪市）に生まれた中村さんは、本が大

好きな子どもだった。親が教師だったので、家にはたくさん本があつたといふ。図鑑や絵本などあらゆる本に

てコピーをつくるという。

「水族館の人間だからこそ、撮れる映像。飼育員が当たり前の光景も面白い場面がたくさんあるんです」

1980年代以降、中村さんが全国初の広報担当部署を開設した鳥羽水族館は、全国ネットのテレビ番組でたびたび登場し、たくさん的人が足を運ぶようになった。インターネットがつながらない環境のなか、「インターネットが次のメディアになる」と、ウェブサイトもいち早く開設した。

手掛けってきた水族館は二桁に及ぶ。「立地が最悪だったり、スペースに限りがあったりとそれぞれの弱みを強みに変えていく。一般的な水族館にても大規模な施設には勝てませんからね」。

「サンシャイン水族館」は都会の屋上という立地を生かして、空飛ぶ

「人間もそこにある環境の中で生きている」と伝えるのが、水族館の使命

1980年、縁あって鳥羽水族館に入社。文系出身の中村さんは、生物に対する知識不足に悩んだ。「大学でマーケティングを学んでいたため、自分にしかできない来場者の目線で見る働き方を考え始めました」。解説板をしつかり読む人は少ないこと、飼育員が当たり前と思っている生物の習性が面白いことに気づいていた。

中村さんの水族館プロデュースには、「水魂」というキーワードが必ず

出てくる。「岩やサンゴを置くだけではダメ。奥行きや広がり、冷たさ、

浮遊感全てを『水魂』と言つていま

す」。それは、手掛けた水族館には必ず設置している「川の水槽」に顕著に表れている。「日本の川は、水族館

では受けない」といわれています。でも魚がジャンプしたり、水の下の生

物に見られるならどうでしょうか。先日は滝つぼを下から眺める水槽も

つくりました。魚がなぜその環境で

生きるのかを伝え、「人間もそこに

ある環境の中で生きている」と伝え

るのが、水族館の使命と感じています

水族館がメディア露出に対しても身であることも問題視。当時、ど

この水族館にも広報担当部署はな

かつた。大学のサークル活動で培った

ビデオ制作や撮影技術を生かし、ス

ナメリの出産シーンやラッコが貝を

割るシーンなどを撮影。東京や大阪

の出版社やテレビ局に送り続けた。

ある日、「遊びのプロ」である友人と地元・天花寺付近の中村川に出かけた。「彼らは私に水の中の魚を見せたかったのでしょう。初めて水中眼鏡をかけて潜つたんです」。しかし、中村さんは魚ではなく、川の流れや白い泡の筋浮遊感、ゆらぎといった水中の世界に感動した。その頃の思い出が、後の水族館づくりにつながっている。

ある日は滝つぼを下から眺める水槽も

つくりました。魚がなぜその環境で

生きるのかを伝え、「人間もそこに

ある環境の中で生きている」と伝え

るのが、水族館の使命と感じています

水族館がメディア露出に対して受

け身であることも問題視。当時、ど

この水族館にも広報担当部署はな

かつた。大学のサークル活動で培った

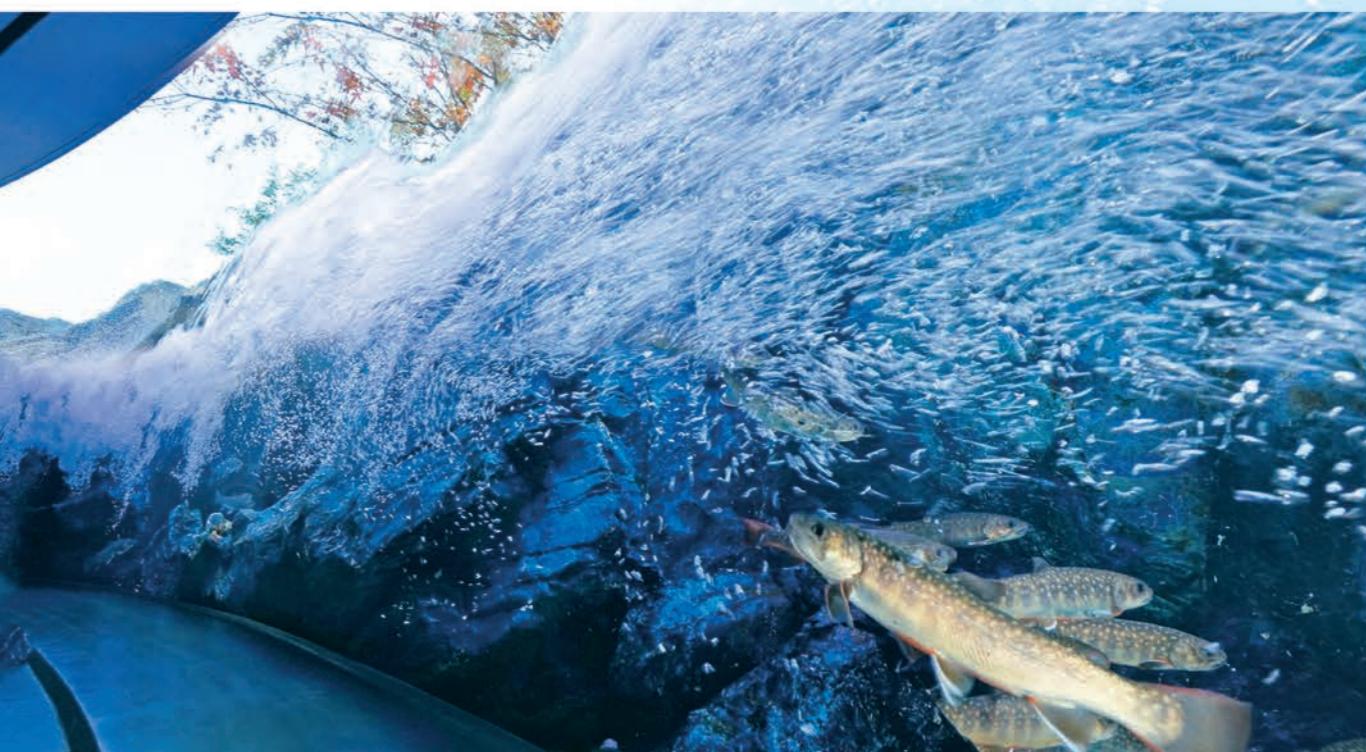
ビデオ制作や撮影技術を生かし、ス

ナメリの出産シーンやラッコが貝を

割るシーンなどを撮影。東京や大阪

の出版社やテレビ局に送り続けた。

昨年、広島県のショッピングセンターに開業したマリホ水族館。激しい流れから生まれる景色とともに、自然の中で生物が暮らす様子を展示している



中村元さん直伝！水族館の楽しみ方

人によって見方は異なりますが、いくつかポイントを紹介します！



1 地図(フロアマップ)を手にする

絶対観たいところはチェックしておきましょう！から見ていくと後半にバテてしまうことも。

2 予想する所要時間の2倍は見ておく

水族館はどんな生物がどんな風に展示されているか分かりません。食事なども入れるともっと時間がかかります。

3 じっくり見るのは「ビビッ」ときた水槽だけ

全てをじっくり見るよりも満足できます。早く見終わったらもう1周してみましょう。

4 大人と子どもは別行動がおすすめ

大人はクラゲ、小さな水槽で浮遊感、涼感を、子どもはカム、カエル、ペンギンといった生物自体に興味を持ちます。バラバラに行動できない時は、子ども優先で大人は我慢！

5 いろいろな水族館に行ってみよう！

展示方法や水槽の大きさ、楽しみ方が異なります。

Profile

中村 元

[なかむら・はじめ]

1956年、三重県一志郡嬉野町（現・松阪市）生まれ。1980年に株式会社鳥羽水族館に入社し、アシカトレーナー、企画室長を経て副館長に。2002年に退社し、日本初の「水族館プロデューサー」となる。日本の大衆文化にすることを天命と考え、道楽と位置づけたトークライブや水族館ガイドの編集、学芸員への講師としても精力的に活動



1.表紙にも登場した伊勢夫婦岩ふれあい水族館シーバラダイスには、中村さんが手がけた水槽がある。水槽の前にはくつろぎのスペースがあり、大人が楽しめる空間になっている
2.伊勢神宮で今年1月からはじまった「おもてなしヘルパー」。中心的に推進した「特定非営利活動法人伊勢志摩パリアフリー・アーセンター」の理事長を務め、三重県全体の観光の底上げを県とともに推進している
3.サンシャイン水族館の「天空のオアシス」。高層ビルを借景に唯一無二の展示が好評を得ている

**機転の利いた発想で
大人がよろこぶ水族館を**

手掛けってきた水族館は二桁に及ぶ。「立地が最悪だったり、スペースに限りがあったりとそれぞれの弱みを強みに変えていく。一般的な水族館にても大規模な施設には勝てませんからね」。

「サンシャイン水族館」は都会の

屋上という立地を生かして、空飛ぶ

「おもてなしヘルパー」がスター

でした。

中村さんの意思を引き継いで水族館を成功させる弟子も現れた。現在は15年前から取り組んでいる「パリ

アリー観光」の後継者づくりを模索中。「パリアフリー観光」とは、移

動に困難な人でも行きたいところ

を実現するためのま

ちづくりだ。伊勢神宮では今年か

ら、「おもてなしヘルパー」がスター

でした。

楽しみたいことを実現するためのま

ちづくりだ。伊勢神宮では今年か

ら、「おもてなしヘルパー」がスター

でした。

楽しみたいことを実現するためのま